

飯田学校の思い出

近藤節夫

私が飯田先生のゼミでご指導いただいた当時は、六〇年安保闘争の興奮も覚めやらず、大学キャンパスは内外を問わず騒然としていた。

時の岸内閣も社会不安解決の出口を見失い、ベトナム戦争も益々激化の一途を辿り、社会的に失望と不安感を増幅させていた。

その当時（一九五九～六〇）慶應日吉キャンパスでは、連日のように著名な知識人たちが安保賛否のアジやプロパガンダ演説を行い、学生は最初のうちは興味本位に、だが次第に真剣に耳を傾けるようになっていった。ライシャワー米駐日大使や、慶應出身の藤山愛一郎外相が来られ、新日米安保条約の必要性を訴えたかと思うと、一方で浅沼稻次郎社会党委員長がやって来て「慶應からは共産党の論客野呂栄太郎先生や、野坂参三議長ら立派な先輩を輩出している。諸君も先輩に負けず、もっと真の現実を見なさい！」と檄をとばされたことを懐かしく思い出す。

教養課程の日吉キャンパス時代は、私自身、受験戦争から解放された直後でもあり、あまりアカデミックな方面に気持ちが向かなかった。学生生活をエンジョイする反面、むしろ三田の専門課程への憧れの方が強かった。この後、初めて三田のゼミで飯田先生の警咳に接することになったが、何といっても一番お世話になり印象に残っているのは、〔卒論〕に関して先生が温かく、研究テーマの選定から参考書類、ヒント、アプローチの方法、まとめ方などについて、二年間に亘り懇切なご指導をいただいたことである。

学級肌で温厚な飯田先生には、二年間のゼミ在籍中に、三田のゼミや、三田祭に備えた研究調査、夏のゼミ合宿の他にも、ゼミ終了後のディスカッションを始め、奥様の温かいおもてなしによる先生のお宅での談論風発の語らいなど楽しく、計り知れないほど学問に対する深い示唆と人生の啓示を与えていただいた。

当時の飯田先生は、少壮気鋭の若手教授としてかなりの著書も物にされ、講義にも、ゼミにも脂がのっている感じがした。大学院生の二人の先輩が、サブゼミを持たれ、私たちゼミの学生は毎回充実した気持ちで、本ゼミとサブゼミに欠かさず出席して、多感な学生時代に自分の選定した専門テーマの研究の他に、専門書輪読を通し討論の楽しさを会得し、友情を育んでいった。

私は、当時混沌とした社会の風潮や、安保、ベトナム反戦、南北問題、沖縄復帰問題などの政治・社会問題の影響もあって、少しずつではあったが、「社会性」に関心を抱いていた。当時、私ばかりでなくゼミの友人を始め、私の周囲の友人たちのほとんどは、少なからず当時の社会情勢に感化されていた。

ゼミの面談入試で、先生は私に最近の読書傾向を尋ねられた後、即座に「ゼミに入って

「河上肇」を研究してみなさい」と優しくアドバイスされた。その頃は、不十分ながら河上肇博士と博士の業績に関する書物を読みあさり、立派な論文を書いてやるぐらいの意気込みで、意気軒昂としていた。しかし、当初の気合の割りには私の卒業論文は、自分自身全力投球出来たとは思えず、卒業後も何となく中途半端であったことに内心じくじたるものがあった。先生が期待されるほど私が意気込んだ卒論「河上肇論」の出来ばえは芳しいものではなかったと思い、十年ほど前、岩波書店より「河上肇全集」が刊行されたのを機会に、密かに書き直してみたいと思った。恐らく、先生にご相談したら面倒とは思いつつ、不肖の弟子ゆえ、きっと私の「続河上肇論」のご指導にお力を貸していただけるのではないかと勝手に想像している

先生の日頃の物静かな語り口と物腰とは裏腹に、先生の内心には頑固なまでに強い意志と若い情熱の血潮がたぎっていることをしばしば痛感させられることがあった。安保闘争に関して「学生なら日本の将来を心配するのが当然です。安保に反対するぐらいの情熱や行動力もない学生こそ情けない」とノンポリ学生や、ただ盲目的に新安保条約に賛成する保守的な学生を批判された。他方で、授業を放棄してまでデモに参加する学生に対しては、一応の理解を示されながらも、学生としての本分を蔑ろにするその無分別について、毅然としてたしなめられたことが強く印象に残っている。また、ご自身、慶應義塾労働組合執行委員長として、必ずしも丈夫ではないお身体を犠牲にされてまで組合活動に打ち込んだ奮闘ぶりには、私たち学生も脱帽せざるを得なかった。「自分の信念を決して曲げず、正論を主張し、実行する勇気と行動力」を先生ご自身の実践を通して教えていただいた。

私が学窓を巣立ってから間もなくして、日本経済は空前の成長を遂げ、世の中は多少落ちついてきたが、暫くの間、私の気持ちはうまくその時代の波に乗り切れず、学生気質を引きずったまま精神的に彷徨っていた。キューバ危機や中国の文化大革命のニュースを聞くたびに血が騒いだり、沖縄の本土復帰問題や米国の北爆開始に関心を持ったり、当時の私は未だ飯田ゼミの課外活動の延長線上にあったといつてよい。その意味で社会人となつてからも、私には正論を押し通す書生っぽさがいつまでも抜け切れず、いまあの当時を振り返ると苦笑を禁じえない。先生は、ゼミでいつも「事実を事実として、黙って受け止めるだけではなく、常に批判的な目で事実を見るようにしなさい」と仰っていた。社会人としての人生に自分なりの解釈を加えながら、いつも私は先生のこの人生哲学を大切に心の中に抱いて歩んで来たような気がする。

私が社会人となってから、ある時期まで真剣にベトナム反戦運動を考えたことや、それに付随した私の一連の行動が、戦時下のベトナムや第三次中東戦争の最中に最前線のサイゴン、スエズ運河やヨルダンにまで足を延ばし、その挙げ句、ヨルダン兵に身柄を拘束されるという、今ならさしずめ国際問題に発展しかねない事件を引き起こすほど過激な行動に走ったのは、いま思うと若気の至りであったに違いないが、勝手に言わせてもらえば、批判精神を持って物事を考えるというゼミ時代に培った思想形成に、遠因が潜んでいるように思えてならない。そう言つては先生には迷惑このうえないとお叱りを受けそうだが、

私の何人かの友人もそう思っている節があるので、先生にはこの点はお許しいただきたい
と
思っている。

学生時代に素晴らしい恩師にめぐり会い、学問と人生についてご指導いただきながら、終
生の友人ともめぐり会い、ともに切磋琢磨できたことを何ものにも代えがたく幸せに思っ
ている。飯田先生にとっては、手のかかる不肖の弟子であったかも知れないが、私たち飯
田ゼミでともに学んだ仲間にとっては、学窓は去ったがとこしえに「飯田ゼミ」は心休ま
るふるさとである。先生には人生の師として長生きをして、未熟な私たちの目標として、
道しるべとしていつまでもご活躍いただきたいと願わずにはいられない。

(株式会社小田急トラベルサービス取締役)